

授業を考える(3)

・・・自分のことばに責任を持つ・・・

子どもを見ていてももう少しことばの力があつたならと思い、国語力を上げる学習をしています。大人になって、何かの協議で相手に伝える内容と思いがことばの力の弱さのために届かず、意見が力を持たないことがあります。ときには曲がり、ときにはねじれて受け止められ、あとから何を言ってももうどうにもなりません。ラグビー選手として活躍し指導者としても活躍した平尾誠二さんのことをテレビ番組で知りました。平尾さんは選手を育て生かすには何が強みで何が足りないかを考え抜いていました。そして、選手に伝えるときは、成果と課題を伝えること、人格を否定しないこと、人と比べないことを指導のルールにしていました。指導者は目標を明確にして強化方針や試合の戦術を伝えます。一度放たれたことばはもう元に戻せません。ことばの重みを知る指導者だと想像し、私は教師に置き換えて考えました。

2年生の算数の授業のことです。問題は、「みんなで写真をとりました。8きゃくのいすに1人ずつすわり、のこりの13人は立ってとりました。みんな、何人で写真をとりましたか?」というもの。答えを出すのが目標ではなく、2年生では問題文をテープ図(細長い帯状のテープの絵でものの数を表したもので表し、図のどこに答えがあるかを書き入れるのが目標です。問題文からわかっていることを確認し、黒板に8きゃくを表すテープがはられました。子どもは、その横に13人を表すテープをつけました。そして、2つのテープを合わせて求める数を口人と書きました。子どもはこれで良しとしていたのですが、ある子どもが言いました。「この考えなら、いす+人間になる」、これに触発されて、「できない!」(8きゃく+13人はできないという意)と言いました。いすを人に置き換える図をもう1つ書いて、「8きゃくを8人に言い換えるといい」と発言が続きました。

1年生の国語の授業を見ました。教材は「スイミー」(レオ・レオ二作 谷川俊太郎訳)。物語の始まりのスイミーとさかなたちが登場する物語の設定を読み取る学習でした。教師から、小さなさかなのきょうだいたちのことがわかるところに線を引こうと指示がありました。

ひろいうみのどこかに、小さなさかなのきょうだいたちが、たのしくくらしていた。
みんな赤いのに、一ぴきだけはからす貝よりもまっくろ。およぐのはだれよりもはやかった。名まえはスイミー。
(東京書籍1年下から抜粋)

子どもはが線を引いたのは、ひろいうみのどこか、たのしくくらしていた、みんな赤い。ある子どもは、スイミーのところにも線が要ると意見を言いました。「スイミーも含まれる。みんな赤いのに、その中で一ぴきだけがスイミーだから。」それを聞いて、きっとスイミーたちは泳ぎ回っていたのかな、泳ぐ競争していたのかなとイメージを広げていきました。

算数も国語もことばを読み、考えを書き、発言を聞き、考えを話せばことばの力がつきます。それが、日常使われるわけです。授業で蓄えた国語力が日常に還元されることによって自分のことばに責任を持つ人になれるのです。